

(様式6)

令和7年 12月 20日

令和7年度博物館専門職員等在外派遣事業実施報告書

文化庁次長 殿

住 所 山梨県甲府市下飯田4-2-32
ステイブル・リヴ・シオノ204

氏 名 森川 もなみ

令和7年度博物館専門職員等在外派遣事業の実施結果について、下記のとおり報告します。

1 派遣期間 2025年 9月 3日 ～ 2025年 11月 30日

2 派遣概要

(1) 派遣先名称

- ① 台南芸術大学芸術創作理論研究所
- ② 北師美術館、太平國小博物館
- ③ 中央研究院歴史語言研究所
- ④ 横山書法芸術館
- ⑤ 新北市美術館
- ⑥ 国立台湾美術館

(2) 派遣内容

台湾ではこの数年間で新たな公立美術館が続々と各地に設置されている。派遣先であった桃園市の横山書法芸術館は2021年に開館し、新北市美術館と太平國小博物館は今年開館したばかりである。また台南芸術大学芸術創作理論研究所の教授が館長を務

める台南市美術館は2019年に開館した。そのほかにも、今年12月中旬には台中市美術館が正式にオープンし、2026年には現在建設工事中の桃園市立美術館が開館を予定している。

一方、国立台湾美術館は、38年間続いた戒厳令が解除された翌年の1988年に開館し、台湾の民主化や芸術表現の自由化とともに歩みを進めてきた美術館である。また中央研究院歴史語言研究所は、1928年に中国の広州で設立され、戦後に台湾に移設された歴史ある研究所で、芸術史を含む人文科学研究における台湾の最高学術研究機関である。

このたびの派遣では、台湾各地の多様な博物館施設や研究機関にて、展示や設備の見学、イベントの体験、担当者の方や館長等へのインタビュー、関係者の方々との交流といった方法で調査をおこなうことにより、さまざまな角度からの知見を得ることができた。特に、新たな時代に即した美術館・博物館像とはどのようなものか、また、文化や言語や歴史認識の異なる多様なバックグラウンドを持つ人々が共生する台湾という地域で博物館施設がいかに包摂的であることを目指しているのか、さらに、資料の保存や研究成果の普及のためにデジタルアーカイブの作成や情報開示・発信をどのように実施しているのかといった課題について、各施設から大変貴重な見識を共有いただいた。これらの知見は、日本の美術館が現在直面しているさまざまな課題に対する解決の糸口やヒントにもなり得ると考えられる。日本と台湾の状況は必ずしも一致するわけではないが、博物館施設における多様性や包摂性、地域とのつながりや地域性を見直し、情報発信、デジタル化など共通するテーマも非常に多く、日本においても応用できる点が多いと考えられる。

（３）派遣成果

派遣の成果は下記に各派遣機関ごとに報告する。なお各機関は異なる特徴を有するため、おおむね事前に設定した各機関ごとの調査研究テーマに基づいて調査をおこなった。各機関の名称、調査研究テーマ、所在地、派遣成果を記し、各機関への派遣期間中に関連施設の見学もおこなった場合は項目を分けて記載した。

① 台南芸術大学芸術創作理論研究所

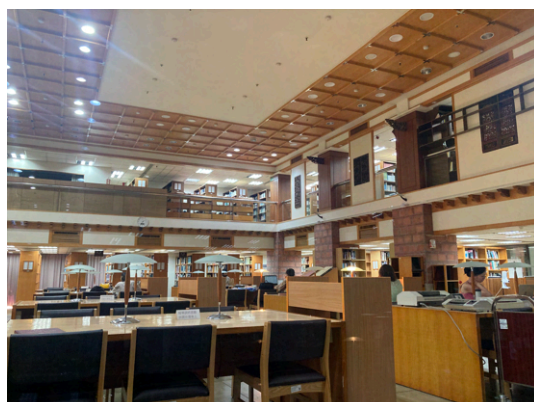
- ・調査研究テーマ：博物館やその他の機関とのネットワークの構築に関すること
- ・所在地：台南市官田区大崎里66号

1) 台南芸術大学芸術創作理論研究所

國立臺南藝術大學（国立台南芸術大学）は台湾南部の台南市に所在する芸術を専門とする大学である。1996年に創設された国立台南芸術学院を前身とし、2004年に大学として認可された。造形芸術、音楽、映像、アニメーション、芸術史、博物館学、保存科学といった芸術に関する幅広い分野の学科を設置している。芸術を専門とする国

立大学としては、他にも国立台湾芸術大学や国立台北芸術大学があるが、台南芸術大学は特に映像やデジタル関連の芸術に力を入れており、企業や地域社会との連携にも積極的である。

今回の受入先である藝術創作理論研究所（芸術創作理論研究所）には、博士課程の大学院生を中心に、分野を越えた様々な人材が集まっていた。若手アーティストのほか、インディペンデントキュレーター、美術館・ギャラリー・商業施設等の展示空間の設計を行うデザイナー、ファッションデザイナー、芸術分野のコンサルティングやブランディングを行う会社経営者、建築設計士、造園デザイナー、美術史の研究者などが集まり、領域横断的な雰囲気の中で研究と実践をおこなっている。研究所を拠点として調査や研究を進めるほかに、異分野の研究者同士で協働して台湾内の展示施設で展覧会を開催したり、研究所内や美術館でシンポジウムを開催することで、新たなネットワークやパートナーシップを結ぼうとしていた。派遣期間中は台湾の著名な映画監督、映像作家である黄明川氏を招いた講義が行われるなど、芸術分野のアーティストを招いた講義やシンポジウムやパフォーマンスが盛んにおこなわれていた。



左上：台南芸術大学外観 右上：図書館 左下：台湾在住シンガポール人アーティスト Daisy Toh氏個展会場での講義と交流会 右下：映画監督の黄明川氏の講義

映像分野については、「動畫藝術與影像美學研究所（動画芸術・映像美学研究所）」が設置されており、芸術創作理論研究所とも連携している。映像分野に関わる研究と人材育成を主眼としており、特にドキュメンタリー映画の分野で多くの人材を輩出し、台湾の映画産業の発展にも深く関わってきたという。またフィルムの保存や撮影機材の保管にも力を入れており、研究所内で保管している台湾の大手テレビ会社が制作したニュース映像フィルムは中華民国の「古物」（文化財）に指定されている。さらに日本統治時代に撮影された国策記録映画『南進台湾』（1939年）のフィルムが2003年に台湾内で発見された際の修復も手掛けるなど、修復研究においても重要な役割を果たしているという。



台湾の貴重なフィルムや撮影機材の保存と調査研究についての展示

2) 台南市美術館

台南芸術大学芸術創作理論研究所の特徴のひとつとして挙げられるのが、台南市美術館との連携である。同美術館はそれぞれ「1館」「2館」と呼ばれる2つの建物で構成され、2019年に正式に全館オープンした。美術館の開館にあたっては現総統の頼清徳氏が台南市長時代に計画を積極的に推し進めた経緯がある。2025年3月より新館長に台南芸術大学芸術創作理論研究所教授の龔卓軍氏が就任した。このことから、台南市美術館と研究所は、共同で展覧会やシンポジウムを開催するなど、緊密に連携している。こうした経緯から台南市美術館の見学もあわせて実施した。

台南市美術館1館は日本統治時代の1931年に建てられた旧台南警察署の建築をリニューアルして使われ、台南市の市定古蹟になっている。展示の内容は近代美術を扱ったものが多く、建築の全体の雰囲気や独特な間仕切りにあわせて展覧会が企画されている。調査の際は、建築を設計した梅澤捨二郎（1890～1958）を紹介する展覧会が開催されていた。

一方、2館は建築家の坂茂が設計した建築で、台南市の花である鳳凰木をモチーフにしており、真っ白な五角形の外観が特徴的なデザインの建物である。2

館ではおもに現代アートを扱っており、調査の際に開催していた展覧会は「The Era of Prompts - A Challenge Letter from AI to Humanity（詠唱世—人工智慧給人的—一封挑戰信）」であった。アートとAIの関係を台湾の複数の現代アーティストの作品を通して考察する展示で、本展キュレーターは動畫藝術與影像美學研究所の羅禾淋氏が務めた。

今後の計画として、2館は国家美術館に昇格することが決定しており、現在新体制のための準備をおこなっているとのことである。現在2館では現代アートの展覧会が開催されているが、国家美術館となった後は、コレクションは1895年から1960年代の台湾美術を核とし、近代美術から戦後美術を中心に扱う予定であるという。



台南市美術館1館



台南市美術館2館

② 北師美術館、太平國小博物館

調査研究テーマ：先進的なコレクションマネジメント、資料管理の在り方

1) 北師美術館

所在地：台北市大安区和平東路二段134号

北師美術館は国立台北教育大学に附属する美術館で、同大学の敷地内にある。当美術館の設立の背景には、一般的な公立美術館とも大学附属美術館とも異なる特殊な経緯がある。現在北師美術館の館長を務める林曼麗氏が国立故宮博物院院長を務めていた際に、アメリカのメトロポリタン美術館が所蔵する石膏像を海外の複数の研究機関に寄贈するプロジェクトが立ち上がり、これに参加したことが北師美術館設立のきっかけとなった。メトロポリタン美術館では19世紀末から20世紀初頭にヨーロッパのさまざまな美術品の石膏模像を制作し、売却していたが、2000年代に残っていた石膏像を手放すこととなり、海外の研究機関への寄贈が計画された。メトロポリタン美術館は寄贈先として美術館を有する機関であることを条件としたため、林氏は寄贈を受けるために国立台北教育大学附属機関として北師美術館の設置を構想した。2006年にお

よそ120件の石膏コレクションが国立台北教育大学に寄贈され、その中からアントワーヌ・バリ（1796～1875）の《ライオンと蛇》から作られた石膏像など11件が常設展示の作品として選ばれ、2011年に北師美術館が設立された。館内の入口近くに《ライオンと蛇》が設置され、そのほかの作品はチケットカウンターや展示室内、階段などさまざまな場所に設置されている。展示室内の石膏像は同じ空間に現代アートが展示されることもあり、同館ならではのコラボレーションが生まれる。調査時に開催していた展覧会「亂流：半睡飛行夢 The Limit is the Turbulent Skies」では飛行や移動をテーマに台湾や香港の現代アーティストによる作品を展示しており、現代アートと常設の石膏像が展示室内に自然に同居していた。



左：北師美術館外観

右：《ライオンと蛇》石膏像、PR・マーケット担当の黄鈺雯氏（右）、筆者



左：「亂流：半睡飛行夢 The Limit is the Turbulent Skies」展ギャラリートークの様子

右：展示室内にさりげなく展示された石膏像

同館は多数の石膏コレクションを生かす手段として、2015年に「One Piece Museum Project (OPM)」を発足した。同プロジェクトは、石膏像を1件（One Piece）ずつ学校に貸し出し、校内に展示したり学習教材として活用するものである。学校で

は借用作品を核として、展覧会づくりや修復体験など多様な学習が企画される。プロジェクト担当者の趙宜恬氏にインタビューをおこなったところ、このプロジェクトは美術館側が主導するのではなく、学校側が積極的に推し進める形を作ることが重要であるという。本プロジェクトに関わる美術館スタッフは数名しかいないため、コレクションの貸し出しをはじめとする事務的な作業量には限界がある。そのため、学校側が借用作品の選定から学習計画、授業内容まで提案し、美術館は学習計画が順調に進むように学校をサポートする立場に徹する。またそのような積極的な姿勢が学校側がない場合はプロジェクト自体も成功しないことが多く、例えば学校側の担当教員が交替した際に、交替後の担当教員のモチベーションによっては貸出作品がうまく活用されなくなってしまうこともあるという。反対に、教員が積極的な場合は学校全体を巻き込んだすばらしい成果を生むこともあるとのことで、成功事例をいくつか教えていただいた。

陶芸の産地として知られる鶯歌に位置し、2016年からOPMに参加している新北市立鶯歌高級工商職業学校（職業高校にあたる）には美術工芸科、陶磁工程科、広告設計科などが設けられており、同プロジェクトでは石膏の修復と展示、借用作品に見られる植物文様の分析とその学習を活かした陶製タイルの設計など同校ならではの計画が立てられ、教員と学生が一体となって学習が進められた。こうした美術に関係がある学校のほかにも、小学校や中学校に貸出が行われる際には、図工の授業で修復体験をしたり、英語の授業で英語による作品紹介をおこなったり、数学的な見方で作品を分析するなど多様な学習に活用されている。また、美術館から作品貸出をおこなう際は石膏のクリーニングの方法を貸出先の担当教員に伝えているという。石膏模像という特殊な性格が学校への長期貸出と子どもたちが作品に直接触れられる機会の提供につながっており、一般的な美術館の作品貸出の考え方とは異なる稀有なプロジェクトであった。

2) 太平國小博物館

所在地：台北市大同区延平北路二段239号

北師美術館のOPMプロジェクトがさらに発展した結果生まれたのが、2025年6月に開館したばかりの太平國小博物館である。台北市大同区太平国民小学（小学校にあたる）の敷地内に設置されている同館の所蔵品は、この小学校の卒業生で台湾彫刻の先駆者とされる黄土水（1895～1930）の《少女》と《男嬰頭像》のみである。《少女》は博物館ができるまでは同校の校長室やコレクションルームに置いてあったそうで、特に戒嚴令時代にはその存在や価値を知られていなかった。その後、日本統治時代の美術史の研究が進み、彫刻家黄土水の作品調査もおこなわれ、改めて台湾美術における重要性が認識された経緯がある。

2点の作品が展示されている黄土水専室という展示空間は、もともと児童が持参したお弁当を温めるための部屋だったが、展示室としてリノベーションされた。このほかに特別展をおこなう空間も整備されている。派遣期間中は、黄土水の生い立ちや家

族のこと、作品にまつわる歴史などを調査した成果が特別展示室にて展示されていた。東京美術学校に留学した黄土水は日本との関わりも深く、展示内容にも日本との繋がりが説明されており、興味深い内容であった。太平国小も日本統治時代に設置された小学校であり、台湾と日本の歴史的な関係を感じながら作品を鑑賞することができる。ただし、小学校内の施設であることから、来館は完全予約制となっている。



左上：特別展示室 右上：お弁当を温めるための部屋をリノベーションした黄土水専室
左下：小学校の廊下と展示室がつながる部分 右下：黄土水《少女》

派遣機関中に同館のイベントにも参加させていただいた。ひとつは、展示室内でのギャラリートークであった。このイベントの特徴として、親子で参加するイベントである点、同校を卒業したボランティアの方がトークをおこなっている点、そしてイベントで使われる言語が学校の授業やテレビのニュースなど公的な場で話される中国語（台湾華語）ではなく台湾語である点が挙げられる。イベントを運営している同館のボランティアは、小学校の同窓会メンバーが担っており、学芸員と一緒にイベントを作っている。学芸員の方に伺ったところ、同館は小学校の歴史と密接に関わっているため、母校への愛情が深い卒業生のボランティアの方々の力は大きく、学校についてなど教わることも多いという。新しい博物館であるが、人々に愛されるような運営の仕組みや信頼関係がしっかりと構築されている点が印象に残った。またイベントで話されていた台湾語は、さまざまな民族が住む台湾において多数派である閩南系の人々

が話す言語で、家庭や街中で使用されているが、若い世代は話す機会が無くなってきている。台湾語による親子向けのギャラリートークは珍しいとのことで、言語の保存と作品鑑賞が一体となった興味深いイベントであった。子どもたちはすべてを聞き取ることにはできないものの、作品を通して意味はなんとなく伝わっているようで、興味津々の様子で年配のボランティアの方のトークを聞いていた。

また別のイベントとして、講堂で教員のためのOPMプロジェクト説明会が開催され、30名ほどが参加していた。説明会後は展示室内でギャラリートークがおこなわれていた。太平國小博物館に展示されている作品はメトロポリタン美術館から寄贈された石膏コレクションではないが、台湾の重要な彫刻家の作品を校内で展示し、作品を核として、子どもたちや保護者、教員、ボランティアの方々、一般の来館者が活動し学ぶ様子は、北師美術館が取り組んできたOPMプロジェクトが理想的に進化した形であると感じられた。



左：ボランティアによる台湾語ギャラリートーク 右：教師のためのOPM説明会

③ 中央研究院歴史語言研究所

調査研究テーマ：先進的なコレクションマネジメント、資料管理の在り方

所在地：台北市南港区研究院路二段130号

中央研究院は台北市に所在する総統府直属の最高学術研究機関で、数理科学、生命科学、人文社会科学の3分野に属する多くの研究所や研究センターによって構成され、およそ1000人の研究者が所属している。派遣受入先は中央研究院内の研究所のひとつである歴史語言研究所で、1928年に中国の広州で創設された。その後日中戦争などで移転を繰り返したのち、1948年に台湾に移転した。歴史語言研究所には歴史、考古学、言語、宗教などに関する研究室や研究グループが含まれるほか、文献資料のデジタル化やアーカイブのシステム管理と維持をおこなう「檔案館」、およそ90万件の図書資料を収蔵する「傳斯年図書館」、考古資料や文書を収蔵する「歴史文物陳列館」が設置されている。研究員の鈴木恵可氏にご協力いただき、歴史語言研究所研究大

楼、檔案館、傅斯年圖書館、歷史文物陳列館ギャラリー、人文社会科学聯合圖書館などを見学し、特に資料アーカイブと情報公開について調査した。

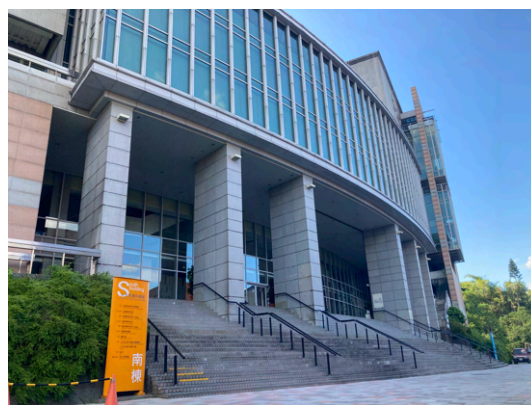


左：中央研究院歴史語言研究所外観 左：研究員の鈴木恵可氏（右）、筆者

中央研究院敷地内には専門分野ごとに図書館が設置されている。人文社会科学聯合図書館などは、18歳以上であれば身分証を提示して受付票に記入すれば関係者や研究者でなくても入館できる。台湾で発行された文献だけでなく、海外の専門書も所蔵されており、地域ごとに設置された一般的な公立図書館では所蔵していないような専門書や研究書、学術誌、新聞記事に誰でもアクセスしやすい環境を提供していた。こうしたことから、研究施設であるのみならず広く学術振興に寄与するための機関でもあることが感じられた。また同じ敷地内に異なる分野の図書館が複数設置されていることから、領域を横断して調査する際にも大変アクセスしやすい。



傅斯年圖書館



人文社会科学聯合圖書館

図書館へ直接足を運ぶほかに、中央研究院が所有する資料のデジタル・アーカイブにインターネットからアクセスすることができる。歴史語言研究所や近代史研究所、台湾史研究所には「檔案館」が設置されており、ここで文献資料や写真などのデジタル化や整理、公開作業がおこなわれている。膨大な資料を絶えず整理し、デジタル化し、公開する作業には大変な時間と労力がかかっていると考えられる。

これらのデジタル・アーカイブは基本的にはすべて公開されている。著作権や収集時の規定などの関係で、アカウントを作成すれば誰でもアクセス可能な「オンライン閲覧可」、館内PCからのみ閲覧と複写ができる「館内閲覧可」、館内PCで閲覧可だが複写はできず自分で書き写すことのみ可能な「館内書き写し可」の3段階の閲覧制限を設定している。筆者が実際にアカウントを作成して館内と館外でアクセスをおこなってみたところ、一般の利用者にも使いやすいデザインになっており、また閲覧制限の段階が資料ごとに示されることによって、利用者にとっては資料のアクセス方法を明確に知ることができ、親切な設計であると感じた。

研究所や図書館にはいくつかの展示スペースがあり、研究所に所属した研究者の功績や研究成果を紹介する展覧会などが開催されていた。見学時には、歴史文物陳列館のギャラリーで考古学者の石璋如（1902～2004）による写真資料展、傅斯年図書館では歴史語言研究所を創設した傅斯年（1896～1950）に関する展示がおこなわれていた。また年に一度、研究院全体を一般に公開し、職員が子ども向けワークショップや交流イベントを開催する「開放日」を設けている。最高学術研究機関と聞くと敷居が高く思われるが、図書館の運営やデジタル・アーカイブの運用方法、各種イベントについて伺い、研究成果や情報をできる限り社会に還元し共有しようとする方針のもと、さまざまな工夫を凝らしていることがわかった。



歴史文物陳列館のギャラリー



傅斯年図書館内の展示スペース

④ 横山書法芸術館

調査研究テーマ：観光振興にも資するような多言語対応や情報発信、夜間開館、地域資源を活用した博物館の魅力向上の取組

1) 横山書法芸術館

所在地：桃園市大園區大仁路100号

横山書法芸術館は書をテーマとする台湾唯一の美術館で、2021年に桃園市立美術館のひとつとして桃園国際空港近くに開設された。書芸館の建物は建築家の潘天壹氏が設計し、2023年に台湾建築賞で最高賞を受賞している。同館は広い公園内に設置されており、公園には大きな池が配されている。この池は桃園ならではの風景として知られる埤塘（溜め池）を模したもので、墨液を溜める「墨池」に見立てており、また池の前に建つ書芸館の5つの黒い建造物は「硯台」に見立てられているという。それぞれの建物には禅の思想を取り入れた小さな池や石庭があり、全体的に落ち着いた居心地の良い空間となっていた。



建物の外観と庭の一部

派遣期間に開催されていた展覧会は「自由自在—臺灣當代女性書藝展（Walking Their Own Paths: Women Calligraphers in Contemporary Taiwan）」で、およそ100年前の日本統治時代から現代に至るまでのおもに台湾の女性による書を紹介し、男性中心的な書の世界にジェンダーの視点から問いを投げかける展覧会であった。



展覧会会場

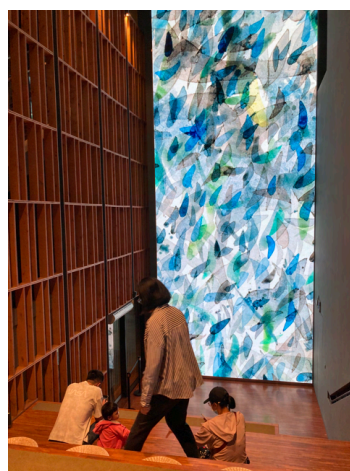


担当研究員の巫伊婷氏

男性書家の妻や娘として記録されてきた女性書家たちの書を改めて見直し、あるいは、戒厳令が終わった1980年代以降に生まれた自由な気風を持つ現代の女性アーティストによる作品を通して女性の身体と書との関係を考察するなど刺激的な内容であった。担当研究員の巫伊婷氏によれば、同館の展示では書の定義をできるだけ幅広く解釈し、書芸の可能性を押し広げようとしているという。そのため同展でも平面作品だけでなく、インスタレーション、パフォーマンス、映像などさまざまな形態の作品が展示されており、現代アート展としても充実した内容であった。また台湾の女性アーティストを核としながらも、日本や韓国、イギリス、フランス、イランなど海外の作家も招聘し、滞在制作による作品も展示することで比較文化的な視点も取り入れていた。



展覧会会場



展示室外の階段を使ったスペースでの展示

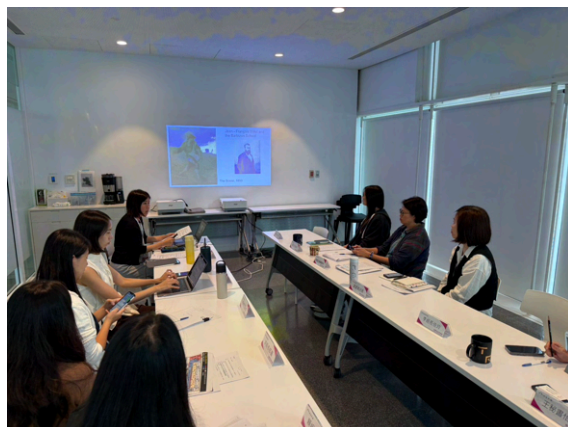
展示室内には若い年齢層の来館者も多く見られ、書や美術の愛好者や年配の方だけではなく幅広い来館者を得ているようであった。実際の統計上でも同館で最も多数を占める来館者の年齢層は30～40代であるとのことで、多忙な年齢層を惹きつける魅力を同館が備えていることがわかる。本展終了後は12月20日から「横山書芸ビエンナーレ」を開催予定とのことで、ビエンナーレの準備をおこなっている様子であった。テーマは「Calligraphy in Movement from Literati's Desk to People's Streets 運動中的書法—從文人的案頭到諸眾的街頭」で、同展においても書の定義を狭い範囲に限定せず、幅広く「書く」表現として捉え、さまざまな視点から書の可能性を考察するという。敷居が高いと思われがちな書であるが、こうした展覧会を通して書の魅力や奥深さを社会に伝えようとする一貫した姿勢を感じるとともに、着実に幅広い層の来館者を迎えている点から、確かにその成果が現れているのだろうと感じた。

2) 桃園市兒童美術館

所在地：桃園市中壢区高鉄南路二段90号

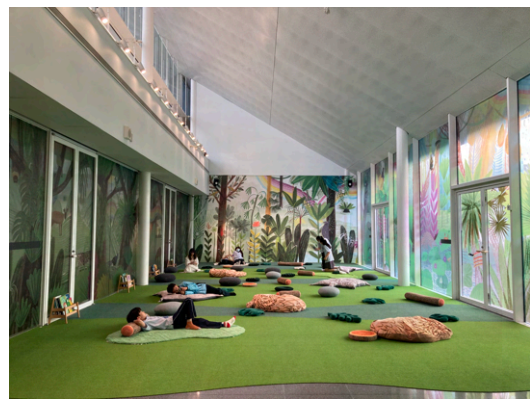
横山書法芸術館は桃園市立美術館のひとつという位置づけであるが、母体となる桃園市立美術館は2026年に開館予定とのことで、横山書法芸術館から徒歩30分ほどの場所に今まさに建設中であった。また、桃園市立美術館の敷地から道路と高架メトロを挟んだ向かい側には、2024年に開館したばかりの桃園市児童美術館が建っている。これら3つの美術館の建設には、国際空港からアクセスが良いこの地域を単に移動の通過点とするのではなく、観光地として少しでも長く滞在してもらいたいという桃園市の狙いがあるという。近隣にはショッピングモールや水族館もあることから、空港近くの一帯の発展を美術館が文化的な側面から支える意図があると考えられる。

また桃園市は台湾第5位の都市であるとともに、主要都市の中では最も平均年齢が若い都市でもある。桃園市児童美術館は台湾唯一の子どものための美術館として構想され、親子や近隣の学校の学習の場として活用されている。派遣期間中に横山書法芸術館、桃園市児童美術館、桃園市立美術館のスタッフと館長による定例会議が桃園市児童美術館で開催され、その後情報交換会を開催していただいたため、同館の見学もあわせておこなった。



左上：桃園市児童美術館外観 右上：展示室内の様子 下：交流会の様子

片側に流れる大きな屋根が特徴的な同館は、展示室、子ども用図書室（児童芸術図書空間）、休憩室、イベントホールを備えている。見学時にはナショナル・ギャラリー・シンガポールとの共催展「When Art Meets Nature 在藝術中遇見大自然」を開催中で、自然や動植物をテーマに台湾とシンガポールの5人の現代作家たちによる作品を展示していた。桃園の歴史とも関係が深い河川をモチーフにした作品では、子どもたちが展示室内で土や水に触れながら川の歴史や科学的な作用についてボランティアの方の話聞きながら作品を楽しんでいた。こうした作品のほかにも、台湾の少数民族と川にまつわる物語をテーマにした社会批評的な作品が展示されるなど、現代アート展としても見応えのある展覧会になっており、大人から子どもまで充実した鑑賞体験が得られる施設であった。またボランティアの方々が館内の至る所に常駐し、気になったことがあればすぐに質問できるような体制が整えられていた。



左上：図書室 右上：図書室や休憩室の内装を手がけた陳逸氏
左下：学生の展示見学 右上：休憩室

2階の子ども用図書室も特徴的で、子どもたちが本を探しやすいように独自の分類法で図書が配架され、また東南アジア系など外国籍の子どもたちが多い桃園市の状況から、さまざまな言語による図書が揃えられている。子どもたちが手にとりやすい低めの本棚に、絵本から芸術系の図書までさまざまな本が並んでい

た。また、休憩室では子どもたちや保護者がリラックスした雰囲気で思い思いの時間を過ごしていた。図書室や休憩室の内装を手がけた陳逸氏は、子どもたちに親しんでもらえるようなデザインをこころがけているとのことで、手描きのイラストを用いた明るいデザインが館全体を親しみやすく柔和な雰囲気にしていた。

⑤ 新北市美術館

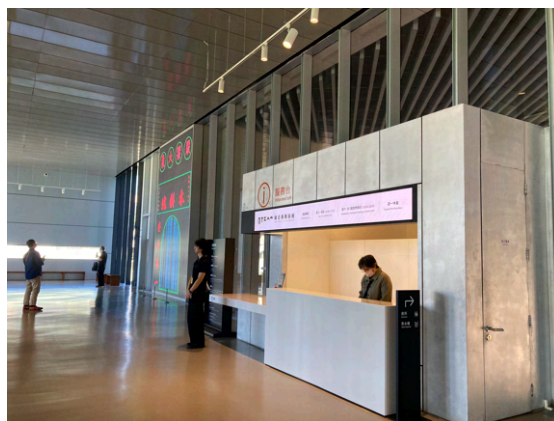
調査研究テーマ：観光振興にも資するような多言語対応や情報発信、夜間開館、地域資源を活用した博物館の魅力向上の取組

所在地：新北市鶯歌区館前路300号

首都台北をぐるりと囲むような形の新北市は、約400万人が暮らす台湾最大の直轄市で、2010年までは台北県と呼ばれていた。2025年4月に開館したばかりの新北市美術館は、新北市の中でも陶芸の街として知られる鶯歌に設立された。鶯歌にはすでに新北市立鶯歌陶磁博物館が存在し、台湾における陶芸の歴史や制作について知る事ができる常設展示や「Taiwan Ceramics Awards 台湾陶芸奨」の開催など台湾の陶芸文化を支えてきた。一方、新北市美術館は鶯歌の文化的な土壌を意識しながらも、陶芸に限らないさまざまなアートを展示する施設として新たに設立された。台湾の建築家である姚仁喜が設計した同館は、壁面を飾る無数のアルミ製パイプの意匠が印象的な建築で、美術館の周りに広がる葦の草むらの風景と融合合うように考えられたデザインになっている。また同館のポリシーは「全民美術館（すべての人のための美術館）」で、すべての年齢を対象とし、多元的な文化と国際的な視点を取り入れる美術館をめざしているという。同館のコレクションの核は20世紀以降の芸術作品で、新北市ゆかりの作家や新北市をモチーフとした作品の収集にも力を入れている。



新北市美術館外観



エントランスの様子

派遣期間中に開催されていた展覧会は「The Architecture of Fear and Cure 建築的恐懼與療癒」、「Relational Field: The Cultural Landscape of New Taipei in the 1990s 關

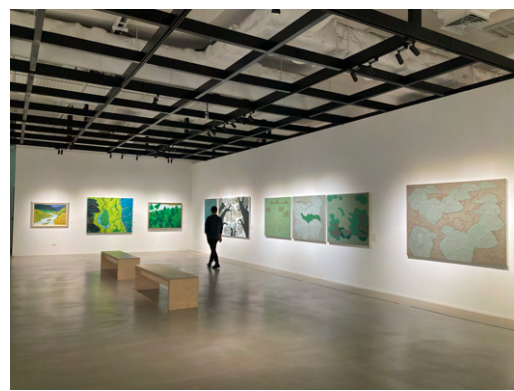
係場域：90年代新北文化地景」、「Samson Young: Pavilion 楊嘉輝：展亭」、
「Generation T: Tap to Play 拇指世代：點擊以開啟」であった。

「The Architecture of Fear and Cure 建築的恐懼與療癒」は台湾や日本の16組の建築家やアーティストの作品を紹介するもので、元来自然の脅威に抗うことから生まれた建築の本質を改めて問い直し、現代建築の存在意義を恐怖や癒しといった概念から捉えようとする展示である。



左：学芸員の謝豊嶸氏 右：「The Architecture of Fear and Cure 建築的恐懼與療癒」の様子

また「Relational Field: The Cultural Landscape of New Taipei in the 1990s 關係場域：90年代新北文化地景」は、戒嚴令が解除された直後の1990年代に台北市（現、新北市）でおこなわれたさまざまな芸術活動を現代の視点から見直し、地域の文化を再構築する展示であった。学芸員の謝豊嶸氏によれば、台北市の郊外として位置づけられてきた台北市は文化的な発展から取り残されてきたが、1990年代に若者による社会運動とともに環境芸術やコンセプチュアル・アート、芸術祭といった前衛的な芸術活動が次々と展開した。本展ではこうした社会的背景と深く結びついた地域の芸術史をさまざまな資料や作品によって考察する地域の美術館ならではの展示内容であった。



「Relational Field: The Cultural Landscape of New Taipei in the 1990s 關係場域：90年代新北文化地景」の様子

「Samson Young: Pavilion 楊嘉輝：展亭」は現代作家を1名招聘して委託制作と展示をおこなう隔年開催のプロジェクトで、見学時には香港のアーティストである楊嘉輝によるインスタレーション作品が展示されていた。また、「Generation T: Tap to Play 拇指世代：點擊以開啟」は教育普及的な意義を持つ展覧会で地元の3つの小学校と協力して子どもたちと一緒に展示内容や作品を作り上げた展覧会であった。「拇指世代」とは、親指でタッチする世代という意味で、生まれた時からスマートフォンなどスクリーンをタッチしてきた世代のことを指しており、彼らの視点で作られたゲームや体験型の作品が紹介されていた。



「Generation T: Tap to Play 拇指世代」の様子

館内には、周辺の風景をゆったりと眺められるスペースや、人がリラックスできるような音と光を用いた空間全体が作品となっている休憩スペースなどが設けられ、作品鑑賞だけではなく人が集まったり余暇を過ごしたりできる工夫が随所になされていた。新しい美術館を目指していることは何かうかがったところ、鶯歌に来る観光客はもちろんのこと、地域に暮らすすべての人々に愛されるような美術館を目指して展示内容を企画していると強調していた。一部の美術愛好家だけでなく、幅広い層の人々が楽しめるよう、できる限り変化に富んだ企画をおこなう予定とのことだった。



美術館の公園と陶芸のモニュメント



美術館の窓から見える風景

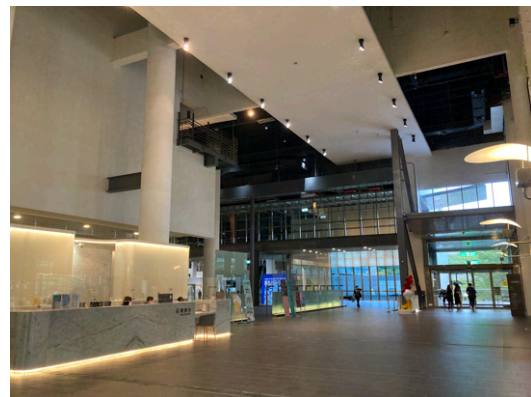
なだらかな山々を背に広々とした草原にたたずむ郊外型美術館の同館であるが、現在の最寄駅である台湾鉄道の鶯歌駅に加えて、まもなく美術館の目の前に新たにメトロ（MRT）の駅もできるとのことで、開通後は交通の便がさらに良くなり、人々の集いの場となることが予想されている。桃園市立美術館の事例も同様であるが、台湾に近年開館した美術館は近隣の交通アクセスや商業施設の発展とともに構想されており、美術館が都市計画における非常に重要な施設として認識されていることがわかった。

⑥ 国立台湾美術館

調査研究テーマ：価値の形成過程にある近現代の美術品等博物館資料の国内外への発信・評価向上

所在地：台中市西区五權西路一段2号

台中市の国立台湾美術館は1988年に台湾省立美術館として開館し、1999年に国立台湾美術館と改称した。明清代の作品から近代美術、現代アートまでおよそ22,000件の作品を収蔵している。重要なコレクションとして、国宝に指定されている林玉山《蓮池》、黄土水《甘露水》、重要古物に指定されている陳澄波《淡水風景》、《嘉義遊園地》などを所蔵している。



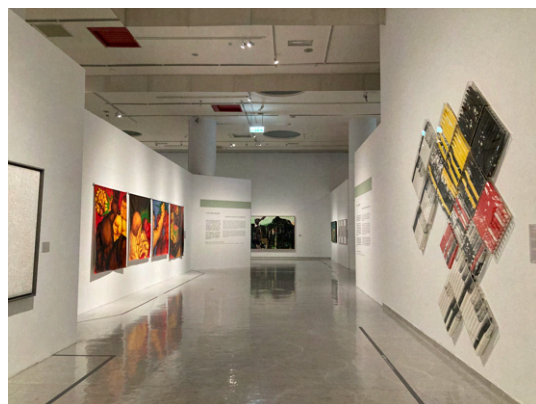
左上：国立台湾美術館外観 右上：エントランスの様子 下：黄土水のレリーフ《水牛群像》の前に立つ研究員の郭懿萱氏（左）と筆者

同館は台湾美術に関する研究を核としてきた。台湾美術史の研究は戦後から続いた戒厳令の解除以降の1990年代より盛んにおこなわれるようになった。同館は台北市立美術館や高雄市立美術館などと同じく1980年代から90年代にかけて台湾において早期に設立された一連の公立美術館のうちの1つで、台湾美術史の構築において重要な役割を果たしてきた。長らく散逸していた作品を収集し、場合によっては修復し、研究した成果を展覧会図録や研究書などの多数の書籍や定期刊行物を通して発信してきた。また専門書の出版だけでなく、例えば現在120巻にもなる『家庭美術館』は同館が毎年およそ10冊ずつ刊行しているシリーズで、近代以降の台湾の芸術家について一人一冊の形式で紹介している。多数の作品図版と研究者による解説がついており、一般の書店にも並ぶ手に取りやすい文献となっており、同館はこうした台湾美術史の普及活動にも力を注いできた。

派遣期間中に開催されていたのは、コレクション展「Arts as Imprints of the Times 時代印記：國美典藏常設展」、特別展「Enduring Imprints - Traces of Life and Art: Shiy De-Jinn's Early Years, 1943-1966 履痕深烙：席德進早期的生命和藝術軌跡, 1943-1966」、そして2、3年おきに開催されるビエンナーレ「Black Water Taiwan Art Biennale 黒水 2025臺灣美術雙年展」で、3つの展覧会はすべて台湾美術をさまざまな角度から紹介し検証するものであった。



コレクション展入口



コレクション展の会場

コレクション展「Arts as Imprints of the Times 時代印記：國美典藏常設展」は館内の複数の展示室にまたがる展覧会で、展示作品の年代ごとに5つのコーナーで構成されていた。明清代の作品を紹介する「中原流風：臺灣早期書畫（中原の風：台湾初期の書画）」、日本統治時代の作品を紹介する「引光顯影：20世紀前期臺灣美術的在地色彩（光が導く像：20世紀前半台湾美術のローカルカラー）」、戒厳令時代の作品を紹介する「浪潮與衝擊：1945-1979 臺灣美術發展（波と衝撃：1945-1979 台湾美術の発展）」、戒厳令解除の時代の作品を紹介する「激撞與反思：1980s～1990s 臺灣美術主體性尋探（衝突と省察：1980～1990年代 台湾美術

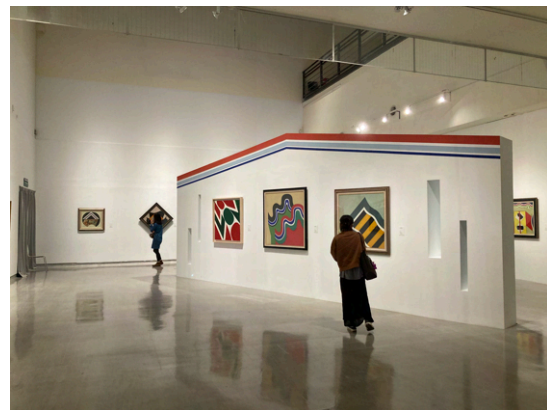
における主体性の探求）」、2000年代以降の作品を紹介する「交融與重構：2000～ 全球視野與數位浪潮（交錯と再構築：2000年以降 グローバルな視野とデジタルの潮流）」に分かれ、各コーナーを5人の学芸員が一人ずつ担当する形で企画された。日本統治時代のコーナーには、石川欽一郎や立石鐵臣など台湾と関連の深い日本人画家のコレクションも多く展示されていた。現在台湾の公立美術館ではテーマ展が主流となっているが、本展は同館の豊富なコレクションを通して台湾美術史の始まりから現在に至るまでの流れを時代順に丁寧に紹介することで、来館者に対して改めて台湾美術の現在地を示そうと試みていた。本展は展示替えをおこないながら2026年の年末まで継続するという。

同館では2018年より文化部（文化政策を担当する行政機関）と「重建台湾芸術史（台湾芸術史を再構築する）」プロジェクトをおこなっており、「展覧会・イベント」、「作品収集・修復」、「学術シンポジウム」、「出版」、「文献資料収集」、「ホームページ整備」の各事業を通して台湾芸術史の再構築を推進してきた。研究員の郭懿萱氏によれば同プロジェクトは近年の台湾における政治やアイデンティティの問題とも関係があるという。台湾芸術の定義や範囲については、台湾とは何か、台湾人とは誰かという問いとも深く繋がっており、同館は芸術を通して台湾のアイデンティティを再考しようと試みている。

特別展「Enduring Imprints - Traces of Life and Art: Shiy De-Jinn's Early Years, 1943-1966 履痕深烙：席德進早期的生命和藝術軌跡, 1943-1966」もこうした視点から企画された展覧会である。四川省に生まれ、1948年より台湾に移った油彩画家の席德進（1923～1981）を紹介する展覧会で、作家と作品に対する綿密な調査研究の成果であるとともに、複雑な歴史的背景によって生まれた台湾芸術の多様性を一人の芸術家の画業を通して紹介する内容でもあった。



特別展入口



特別展の会場

また、同時に開催されていた第9回台湾美術ビエンナーレ「Black Water Taiwan Art Biennale 黒水 2025臺灣美術雙年展」は、アートフェスティバルや国際映画祭などで評価を受けた31組のアーティストによる作品を展示していた。

展覧会のテーマである「黒水」には、移動、離散、植民地支配による恐怖といった台湾の歴史における暗い面に焦点を当て、台湾美術史において不可視化されてきた問題を見つめる意図があるという。台湾はオランダ、日本の植民地支配、白色テロ、先住民族への抑圧といった植民地主義的な暴力とそれによる移動や離散を経験しており、本展ではこうした歴史とアイデンティティの問題を台湾現代アート の視点から改めて検証している。また、日本の植民地統治をモチーフとした現代アーティストによる映像作品なども紹介され、既述のコレクション展の日本統治時代の作品群とあわせて鑑賞することで、単純な善悪の問題ではない台湾の多層的な歴史認識について考えさせられる展示となっていた。



左上：ビエンナーレ入口 右上：会場内 下：日本の植民地統治をテーマにした作品
林安狗《牙齒、血液與鄉愁 Teeth, Blood, and Nostalgia》

同館は展示室のほかに、図書室、ミュージアムショップ、カフェ、レストラン、子供用のプレイルーム（児童芸術基地）を備えている。児童芸術基地は90分ごとの予約制で、子どもたち同士が交流しながら工作などをして遊ぶ空間「Art + Play Space（互動體驗空間）」と、絵本が読める空間「兒童繪本區」に分かれており、保護者が1人ついていれば子どもと美術館で時間を過ごせるようになっている。また子育て中の職員の方にお話を伺ったところ、同館職員向けに館内に保

育園が設けられており、出勤の際に子どもを預けることができ、子育て中も無理なく仕事を続けられる制度が整っているとのことだった。



児童芸術基地の入口



カフェスペースとショップ（奥）

（４）成果の活用計画

本派遣では、台湾の美術館や研究機関を訪問し、新たな時代に即した美術館像についてさまざまな角度から調査研究をさせていただいた。新時代に求められる施設として明確な目標を掲げて近年開館したばかりの美術館や、台湾の多元的な歴史と文化を長らく見つめてきた美術館や研究機関など多様な機関を調査することができた。多忙な中にもかかわらず多くの時間をさいて貴重な情報を共有くださった各派遣機関の皆様は心より感謝申し上げたい。

各機関ごとに異なる特色があったが、すべての機関で共通している点として、多様な言語や文化、アイデンティティ、歴史認識を前提とした取り組みが意識されており、さまざまな背景を持つ人々が互いの存在や価値観を尊重し、多数派の人々は少数派の人々について学び、絶えず自己や社会をクリティカルな視点で見ようとする姿勢が印象に残った。

今後、派遣で得た情報は館内外に共有したいと考えている。筆者が所属する山梨県立美術館は1978年に設立し、まもなく開館50年を迎える。ジャン＝フランソワ・ミレーの作品をコレクションの核としてバルビゾン派の作品を収集し、同時に山梨県ゆかりの作家による作品の収集と展示をおこなってきた。また開館当時に「開かれた美術館」を掲げてボランティアや教育普及事業などを整備して以来、時代にあわせた変化を取り入れながら各種事業を続けてきた。しかし近年では、来館者数の問題をはじめ、地域振興や観光・産業との連携、多様な利用者のための包括性、デジタル・アーカイブの整備といったさまざまな課題を抱えており、こうした課題に向き合いながら50年の節目を迎える準備をおこなっているところである。今回の派遣で得た知見をこれらの課題解決に活かしていきたいと考

えている。また館内だけでなく、日本の博物館施設に共通する課題の解決に少しでも役立てられるよう館外においても研究会や勉強会等で積極的に情報共有をおこなう所存である。

以上